

## 根岸党と根岸：江戸と明治をつなぐもの

TAKAHASHI, Sumiko / 高橋, 寿美子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

123

(終了ページ / End Page)

141

(発行年 / Year)

2009-10-29

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022616>

# 根岸党と根岸——江戸と明治をつなぐもの

高橋 寿美子

## はじめに

根岸党とは、明治20年代に東京根岸とその周辺に居住した文人の一団を指す。文士や画家を中心とする集団ではあるが、文学上もしくは芸術上の結社の意味を持つものではなく、相互の住宅の地理的条件や共通の趣味を介した交遊から生まれた集団であった。明治20年前後より漸次形成された根岸党は、次第に文壇の一派として認識されるようになり、「根岸派」とも呼ばれるようになる。なお、根岸短歌会をめぐる正岡子規の一派もまた「根岸派」と呼ばれることがあるが、本稿で扱う集団とは別のものである。

根岸党の構成員は時期によって出入りがあり、また証言者によっても異同があるが、おおよそ以下ようになる。現代の意味でいう文学寄りの人物としては、幸堂得知（天保14－大正2）・饗庭篁村（安政2－大正11）・須藤南翠（安政4－大正9）・宮崎三味（安政6－大正8）・森田思軒（文久元－明治30）・高橋太華（文久3－昭和22）・関根只好（文久3－大正12）・中西梅花（慶応2－明治31）・幸田露伴（慶応3－昭和22）、美術寄りの人物として、川崎千虎（天保6－明治35）・久保田米僊（嘉永5－明治35）・岡倉天心（文久2－大正2）・富岡永洗（元治元－明治38）がおり、他に実業寄りの人物として、高橋健三（安政2－明治31）・檜崎海運（万延元頃－明治33）・藤田隆三郎（生年、没年不詳）などが挙げられる。

「根岸党」という呼称が何時、誰により言われ始めたのかは定かでない。しかしながら、それが根岸という地域名に由来するものであることだけは確かである。本稿では主に、根岸党誕生の地であり、活動の舞台であった根岸という

空間に着目し、その歴史的・文化的意味について考察することを目的とする。

## 1 根岸党の形成過程

饗庭篁村が文選工として『読売新聞』に入社したのが明治7年、その篁村が、当時三井両替店員であった幸堂得知と知り合ったのはその頃である\*1。明治8年、幸田露伴が入学した東京師範付属小学校で実習のために漢文を教えていたのは宮崎三味で、その三味は、下谷御徒町に儒者の息子として生まれ、幸田家が御徒町にあったことから露伴とは特に親しんだという。さらに、高橋健三と藤田隆三郎とはともに、明治11年まで東京帝国大学で法律を学んだ。このように、根岸党の何名かの交友は明治10年前後より始まっていた。あるいは、少なくともその頃より顔見知りであった。そういった個々の交友がいくつもつながり合さり、根岸という場所に集結するのは明治20年前後のことである。まずは、根岸という空間を中心として、根岸党がどのように形成されていったのかを明らかにしておく。

明治19年、饗庭篁村が京橋から根岸御隠殿に転居した。『読売新聞』に入社後の篁村は、文選工から校正係、記者へと出世、新聞界の転換期にあたるこの時期、同紙の「事実上の編集総務として巧みにかじをとり」、社務のかたわらに自身の小説を次々に連載、また劇評、書評も書くという読売新聞社の「大黒柱的存在\*2」となっていた。また、同年11月調べの官報附録『職員録』では、当時、東京始審裁判所判事であった藤田隆三郎の住所が根岸金杉村になっており、その藤田とは大学の同窓で、当時、内閣官報局次長（22年には官報局長に就任）であった高橋健三も既に根岸に住んでいたという\*3。篁村は高橋の追悼文集『自恃言行録』（明治32年）に収録された「逸事の十」において、その頃杉浦重剛によって高橋健三と引き合わされ、以来親しく往来するようになったと回想している。

明治20年10月、岡倉天心が欧米視察より帰国する。天心はアーネスト・フェノロサとともに美術取調委員として欧米諸国を歴訪、その調査は約10ヶ月にわたるものであった。天心が根岸御行の松迎りに移り住んだのが明治16年の夏、その後は明治18年の約半年間を除き、根岸付近、具体的には当時にお

ける下谷区北部のあちらこちらに転居を繰り返す。18年2月、天心が文部省学務一局詰（準判任官）となった時、御用掛の一人に高橋健三がおり、少なくとも二人はその頃には相知る間柄となっていたが、彼らが交友を濃くしたのは天心が欧米視察を終えた後であると考えられる。帰国した翌月の11月には、天心は高橋健三が創設した月評社発行の書評誌『出版月報』の社友になっている。

天心はまた、おそらく高橋健三を通じて藤田隆三郎を知ったが、彼らの交友は「同じ国粹主義を奉じていたところから、共鳴する点が多く<sup>\*4</sup>」、互いの子供が同級生、同窓生であったこともあり、根岸時代には家族ぐるみの付き合いをしていたと天心の長男岡倉一雄氏が証言している。これらの事実を合わせると、高橋健三を中心として、饗庭篁村・藤田隆三郎・岡倉天心らの交友が浮かび上がってくる。前掲の『自恃言行録』に収められた「高橋健三が根岸に住まわつて居た時、同じ根岸党の藤田隆三郎、岡倉覚三、饗庭與三郎と都合四人で重箱肴を拵へ、大きな瓢箪を掲げ、闇の夜に上野の杉の森の中に往つて提燈も点けずに酒宴を開いた<sup>\*5</sup>」という逸話は、この頃にあったことなのかもしれない。

また、この年の8月には、下谷下車坂町にいた川崎千虎が根岸西藏院前金杉村に転居している<sup>\*6</sup>。講談社版『近代日本美術事典』には、天保6年名古屋に生まれた千虎は「明治一一年上京し、勧商局、大蔵省などに出仕、のち博物館御用掛となり美術品の整理をおこなう。二五年岡倉天心より東京美術学校での考古学および本邦武裝沿革の講義を依頼され、嘱託教員として二八年まで教えた<sup>\*7</sup>」とあるが、20年当時の千虎の職は不詳である。ただし、この2年後に天心と高橋健三が創刊する雑誌『国華』には、第一号より千虎の「本邦武裝沿革考」が連載されている。千虎は、後の明治30年には、東京美術学校教授になっている。

翌21年3月、三井銀行青森支店長を辞した幸堂得知が、下谷区上野広小路町（六阿弥陀横町）に移り住み、8月頃には、創刊間もない『東京朝日新聞』に客員として入社した。篁村は、この年の6月には得知と塩原温泉へ、7月には宮崎三昧らと上州霧積温泉へ、11月には再び得知と伊豆への旅をしている。

他にこの明治21年には、彼らの結びつきを強めたと考えられる公的な事象が多数存在する。3月の日本演芸矯風会発足会に向けた打ち合わせには、篁村・三昧・思軒が参加、更に、同じくこの頃から、徳富蘇峰や思軒などが文士

に呼びかけて「文学会」という懇親談話会が出来ており、そのメンバーには思軒のほか、当時は既に政治小説により人気作家となっていた須藤南翠や、篁村の推晩により『読売新聞』に入社していた中西梅花も含まれ、翌年の初め頃からは露伴もそれに加わった。また、21年5月から9月にかけて、天心は近畿地方の古美術調査を行っているが、思軒はそれに同行し、『郵便報知新聞』に「奈良より」「奈良の古美術」を掲載している。篁村・南翠・思軒らが明治22年に創刊される雑誌『新小説』の発刊企画を進めたのもこの年の秋頃である。

22年2月、大日本帝国憲法発布の日に合わせて新聞『日本』が発刊された。同紙の発行人の一人が、明治19年頃に饗庭篁村と高橋健三とを引き合わせた杉浦重剛であり、また、同新聞の発起人の一人であり、官報局員で高橋健三の部下でもあった陸羯南がその主筆である。当時杉浦と羯南はともに根岸に住んでいた。高橋健三は、『日本』の編集に協力し、その指導者の一人でもあった。同紙は創刊と同時に、歴史画、歴史彫刻の懸賞募集をしたが、その審査員には高橋の他、川崎千虎・饗庭篁村も含まれている。またこの月、得知・篁村・太華が三河島を漫遊し、篁村がその様子を「燈台下明しの記」に描いている。

6月、大阪から一時上京した宮崎三味を囲んで、篁村・南翠・思軒らが会食。帰阪する三味を送りがてら箱根塔ノ沢に遊ぶ計画が立てられたが、思軒と南翠とは仕事で行けず、結局篁村一人が同行、数日後には二人を追って得知が国府津に向かった。得知（「箱根ぶちぬ記（一名国府津初納涼）」）と篁村（「箱根ぐちの記（一名五日の恥）」）がその模様を作品化している。三味は、この時の帰省で依田学海のもとを訪れ、小説「露団々」で文壇に登場した幸田露伴が、かつて自らが東京師範付属小学校で教育実習をしていた時の生徒であった成行と同一人物であることを知り、露伴を会主として開かれた「珍書」「品評会」に参加、二人は対面を果たしている\*8。また、この6月、『読売新聞』に、「大の酒好」の千虎が近傍で「酒の決闘」があることを聞き、「どうぞ助太刀がしたいがまだいつ幾日も定まらぬか」「決闘はいつだいつだと毎日催促に来るゆゑ」、篁村が「味方か」と尋ねると、「一方では吞たらぬから両方の助太刀をして打死するまで吞んでみたい\*9」と千虎が応えたという記事が載っており、二人がこの頃には既に親しくしていたことが分かる。

7月、学齡館主人の高橋省三が、石井研堂を編集に迎え雑誌『小国民』を創

刊、太華は前年に創刊された競合誌『少年園』に引き続き、その編集をも監督するようになる。同誌には、太華・得知の著作や富岡永洗の挿絵が掲載されている他、露伴は常連執筆者といってよいほど多くの作品を寄稿している。同誌の編集長石井研堂は、太華とは小学校の同窓で親しい友人、露伴とも仲が良く度々釣をともした。後には明治文化研究でよく知られ『明治事物起源』（明治41年）の筆者でもある。高橋省三は、もと『少年園』営業部に勤めており、太華とも相知る仲であった。明治25年に非売品として出版された根岸党の紀行『草鞋記程』の編集兼発行人を務め、また、その翌年に篁村らが起こした雑誌『狂言綺語』の発行人となっているなど、根岸党とのつながりが強い人物でもある。同月、天心が精力的に創設準備に当たってきた東京美術学校の商議員に高橋健三が任命されている。

9月、高橋健三・岡倉天心・藤田隆三郎が、篁村の誕生会をかねて根岸の鶯花園にて観月園遊会を催した。同会には、千虎・得知の他、画家の高橋応真も参加、その模様は篁村が「観月園遊会」で伝えている。他に、千虎と篁村とが雨見会を催し（篁村「雨見の記」）、得知・篁村・太華が山東京伝・鶴屋南北・葛飾北斎らの七墓巡りに出かけ、篁村が10月に、その模様を記した紀行「七墓巡り」を発表している。またこの9月には、思軒と天心とが事務委員と文芸委員を兼ね、篁村・南翠が文芸委員に名を連ねた日本演劇協会が発足、翌月には、天心と高橋健三とが美術雑誌『国華』を創刊した。あまり知られていないが、この「国華」という雑誌名を付けたのは、篁村であった。『天心手藁』高橋太華「序\*<sup>10</sup>」（大正3年）によると、太華と天心とが相知るようになったのもこの頃である。

10月、得知と「滝野川の紅葉と染井の菊を見物」に行った様子を篁村が作品化（「紅葉と菊」）、翌月には篁村・太華らが甲州旅行をし、得知と関根只好が見送りに出ている。この甲州旅行の模様を描いた紀行「山めぐり」は、篁村と太華とによる合作であり、後の根岸党の旅の記録に見られる交互に紀行を執筆する方法が初めて採用されている。12月には、篁村・太華・得知が大宮旅行をし、篁村が紀行「雁ハ八百矢ハ三本」にその模様を記している。同じ月、森田思軒が本所から根岸金杉村に居を移す。当時思軒は、報知新聞社に在籍しながら『国民之友』に多数の翻訳文学を寄稿、また他に、矢野龍溪が創立に参

画した錦城学校で『莊子』の講義をした。さらにこの月から翌年にかけて、『読売新聞』紙上で得知・篁村・只好・梅花・露伴がいわゆる緞帳芝居の合評「緞帳巡り」を繰り広げる。

以上、明治19年から22年までの党員の居住状況及び彼等の動静を窺わせる事実を列挙してきた\*11。彼らが根岸を中心として公私にわたる交際を繰り広げ、根岸党という集団が徐々に形作られていった過程が分かるであろう。この翌年の23年には、『大阪朝日新聞』を辞した宮崎三昧が東京に戻って根岸に住み、幸田露伴が根岸から程近い谷中天王寺町に居を構える。そして8月、岡倉天心が主催して、シカゴ万国博覧会広報のため来日したガワード（もと東京駐米公使館書記官）を向島の割烹八百松で饗応した。同会には、当時東京美術学校長をしていた天心、文部次官の辻新次、帝国博物館総長九鬼隆一の他、美術関係者や文士などが参加したが、その中に饗庭篁村、藤田隆三郎、宮崎三昧、森田思軒ら根岸党の面々が含まれていた。当日の様子は、思軒が『郵便報知新聞』上で、それに続いて篁村が『東京朝日新聞』上で伝えているが、これが筆者が現在把握する限りにおいて、根岸党という名称が使われた最も早いものである。つまり、明治20年前後から公私にわたる交友を通して漸次形成された集団を、遅くとも明治23年には、彼ら自身「根岸党」として認識していたということである。さらに、24年以降になると、新聞・雑誌に外部から根岸党に言及した記事も見られるようになり、根岸党の名称及び存在が、一般にもある程度知られるようになっていたことが分かるのである。

## 2 江戸期における根岸

根岸は東京の東北部、上野の山の北陰に位置する地域で、現在のJR山手線鶯谷駅・日暮里駅間の線路東側と金杉通り北側の一帯にあたる地域である。その地名の起こりは、15世紀頃と言われ、広沢（後の不忍池）の岸辺、上野山の根の岸など、地形から生まれたとも伝えられている。現在の根岸は、旅館・社寺が混在する商業地区で、その間をぬって住宅が立ち並び、また中には、鶯谷駅下の言問通り周辺のように飲食店の多い歓楽街となっている地域も含まれるが、江戸期には、武蔵国豊島郡金杉村に属し、江戸の中心部から約6キロメ

ートルの距離にある閑静で風光明媚な土地であった。

宝暦4年、輪王寺宮の御隠殿が造られた頃の根岸は、その殆どが東叡山領の百姓地であったという。それが文化年間を境に、田畑の間に大商人などが所有する寮の数が増加し、それと同時に文人墨客、風流人などが幽棲の地とし始めた。吉原に隣接する地域でもあった根岸には、吉原の遊廓自体が所有する寮や妾宅も多く建ち並んでいた。上野の山の後方にあたるため、同地は比較的火災の心配も少ない地域であったようだ。

かつての根岸のランドマークに、御行の松があった。根幹が直立し、上半から枝が傘を広げたように四方に垂れ均整を保ったその姿は歌川広重にも描かれ、江戸十八松の一つに数えられた名木である。時代が下って大正15年には天然記念物の指定を受けることになるが、当時の高さは、約13.6メートル、直径4.0メートル、樹齢は約350年と推定された。安政年間に板行された江戸切絵図には、松の木と不動尊の小さな社祠が描かれ、傍に「此辺一面根岸ト云\*12」と記されており、少なくともその頃は根岸という地域のとらえかたが比較的大まかで、御行の松を中心にしてその近辺一帯を称したと考えられる。

この御行の松の前を音無川という小川が流れていた。それは王子の金輪寺の下で石神井川から分流し、中里、田端、日暮里、根岸を経て、千住付近で隅田川に注いだ石神井用水のことで、「音無川」というのは、王子の分流地点より下流における通称である。村の中部を東西に貫流したその川は、根岸の景観の重要な構成要素であり、旗本の隠宅、裕福な商人の寮、妾宅、文人墨客の庵などは、みなこの音無川に沿って並んでいた。音無川の清い流れは、用水として田畑を潤すだけでなく、夏には蛍が飛び交い、冬には丹頂鶴が降り立ち、その川沿いの道は、風流人たちの散歩道でもあった。

江戸期より根岸第一の名物といわれたのが鶯である。文政10年刊の『江戸遊覧花暦』の「根岸の里」には「東叡山の北の麓なり。此里の鶯は声すくれてよきゆゑに、人々はつ音を聞かむとて、風流の庵をむすへる文人墨客の許へ知己のひとひと訪て詩を作、歌よみ、あるひは俳諧茶の湯等をもよほし、春の日のなかきもみしかしとおもふはかりなり\*13」、また、文政12年に成立したとされる『江戸名所図会』に「呉竹の根岸の里ハ上野の山蔭にして幽趣あるか故にや都下の遊人多くはここに隠棲す。花になく鶯、水にすむ蛙もともにこの地に



産するもの。其声ひとふしありて世に賞愛せられはへり\*14」とあり当時の状況を偲ばせるが、現在も残る鶯谷という地名も、同地が鶯の生息地であったことによるものである。「初音の里」なる別名を持つようになった根岸では、弘化4年以降、毎年3月になると鶯会が行われた。それは鶯の鳴き声の良さを競う集いで、江戸市中はもちろん日本各地から名鳥が集められ、音無川沿いの家屋の軒下に鳥かごが下げられた。水島爾保布の『愚談』には、「『ます鏡』、『千代の魁』、『朝緑』などと花魁のやうなお菓子のやうな又は相撲取のやうな名前のついた鶯籠が、各自数寄をこらし贅を尽した台に載せられ、上りまがまちに或は玄関に各一個づつ据ゑられ、「蓑と笠とが干枯らびた鴉瓜と一しよにかけてある荒壁の百姓屋の上り口に屏風の金砂子が烟り、水仙香の籠花活が飾られるのもその時だ。又札差しの隠居所の切戸が開かれて奥の茶室に緋の毛氈が敷かれるのもその日である。黄八丈づくめの白髯の老人が、面打ちのモデルになりさうな顔をして、妾宅の門口に杖を停めて耳を傾けてゐるかとおもへば、小紋の長羽織を着た、豆本田の薄疱瘡が町与力の別荘の玄関で感に堪へて聞き惚れてゐる\*15」と鶯会開催中の根岸の情景が描写されている。鶯会の結果発表会は、音無川沿いにあった梅屋敷で行われた。

江戸期に根岸に住んだ著名人には、画家として谷文晁と比肩され、江戸琳派の創始者としても知られる酒井抱一、浮世絵をもって聞えた北尾重政、また『江戸繁昌記』を著わした寺門静軒、古文辞学を排撃し、江戸文壇に新清の氣を注入したといわれる亀田鵬斎などがあつた。姫路城主酒井忠以の弟酒井抱一は、37歳の時に西本願寺で出家し権大僧都となるもすぐに隠遁、画ばかりでなく、書、俳諧、狂歌、戯文などにも親しんだ人物である。その彼が文化6年、住まいを根岸に移し雨華庵を結んだ。東京都台東区役所版『台東区史』によれば、雨華庵では市川米庵・大田南畝・亀田鵬斎・菊池五山・柴野栗山・谷文晁など、多くの文人たちが友としてそれぞれの道を語らい、夜ともなれば、吉原に駕籠をとばして「キレイな遊び\*16」をしたという。また、ある時は、吉原の遊女たちから、せがまれるままに楼上に画席を設けて画の手ほどきをしたり、書や歌、俳諧などの指導にもあたつた。文化11年の正月の賀宴に、抱一が同じ根岸に在住している文人たちを招いた。集つた者の中には、前述の北尾重政や亀田鵬斎のほか、蒔画師原羊遊斎、書家の烏山、雛人形師玉芍、金細工の太

田桂舟、また今田という歌学者らがあり、抱一の侍臣兼門人というべき鈴木其一も連なった。その席上、誰いうともなく「根岸の集い」という名が生まれ、以来、雨華庵をめぐる趣味を語る文人たちの集まりを「根岸の集い」と称するに至ったのだという。それが、ともに同じ根岸につどう「趣味を語る文人たちの集まり」であるという点から言えば、根岸党は、「根岸の集い」の明治版と言えるであろう。また、抱一をめぐる交遊では、これとは別に、根岸住民には限らない「下谷組」なる集まりもあったという。

天保6年の『諸家人名録』によれば、その頃根岸に住む文人だけで30名を数え、そこは、文化温床の地ともなった。しかしながら、それから僅か6年後、水野忠邦による天保の改革が行われると、根岸は次第に寂れていく。それは、武家や町人が百姓地に住むことを禁じられた為であり、以後屋敷が引払われ、幕末には根岸の半分は田畑に戻っていたという。

### 3 明治期における根岸

明治期に入り、江戸市外であった郊外地にも市民が自由に移り住む事が出来るようになると、根岸には再び屋敷や別荘が建てられるようになる。明治22年には、村内の石神井用水以南が下谷地区に入れられ、上野に近い方から上・中・下根岸町とし、以北は日暮里村に入れられた。先に、江戸期における根岸という地域の捉え方が比較のおおまかであったことに触れたが、明治期以降も、「根岸」と言った時に人々が想起する地域は、必ずしも行政による地域区分と同一ではなかったようだ。例えば、田山花袋の『東京の三十年』（大正6年）に、鶯谷にあった温泉割烹伊香保を指して「根岸の伊香保<sup>\*17</sup>」と記され、幸田露伴が晩年に、谷中天王寺町に住んでいた頃を回想して「根岸にいた時<sup>\*18</sup>」と語っているなど、ある時期までにおいては、現台東区の西半を占める地域、つまり上野台地南部にあたる上野台地東麓の下谷、北西部の谷中、南麓不忍池周辺の池之端などを含めた旧下谷地区をも含めて「根岸」と言われる場合もあったものと考えられるのだ。

明治22年の夏、岡倉天心が下谷西黒門町から根岸に居を移す。岡倉天心の長男一雄氏によれば、その後の天心は「今までのように猫の目のごとく」住居

を「急に変わる習慣をピツたりやめてしまった\*19」のだという。明治22年当時8歳であった一雄氏は当時の根岸を次のように振り返っている。

当時の根岸は、輪王寺宮家が栄えていた旧幕時代の佛が多分に残されていて、下町の大商人の寮とか、文墨に隠れた逸民の家とかが相当に多く、しごく閑静を極めていた。「セキ」とよんだ音無川の流れが中部を東西に貫流して、その北方はわずかの家居をへだてて三河島田圃に接し、江戸の田舎という気分が横溢していた。そして地域の区分も、鎮守の氏子に従い、元三島、石稻荷の大塚、御隠殿の杉崎、御行の松の中村と分れており、史跡とも見るべき宮家の御隠殿は、杉崎の近くに、抱一の雨華庵の跡は石稻荷附近にあった\*20。

明治期に入り、根岸に建てられる人家は時代をおって多くなっていったが、根岸党の活動期である明治中期において、同地ははまだ江戸の風情を多分に残す場所であったようだ。根岸のランドマークであった御行の松は、変らぬ姿で立ち続け、前述のように大正15年には天然記念物の指定を受ける。昭和3年に落雷が原因で枯れ死し、2年後に伐採されるに至るまで、それは根岸近郊のどこからも眺望の中にあったという。明治26年には樋口一葉の小説「琴の音」に描かれたり、「薄緑お行の松は霞みけり」(27年)、「松一本根岸の秋の姿哉」(同前)と、晩年を根岸で過ごした正岡子規の俳句に詠まれるなどしている。現在台東区根岸四丁目の西藏院不動尊の境内にある御行の松は、三代目に当たるものである。枯れた初代の木の一部は境内に展示されている他、敗戦後、初代の木の根を掘り起こして彫った不動明王像が不動尊の中に祀られている。

根岸の中央部を東西に貫流する音無川は、付近の田圃の用水として所々に堰が設けてあったことから明治期には「せき」と呼ばれるようになった。名前が変わろうともその清らかな流れは健在で、江戸期の如く川辺に鶴が降り立つことはなかったが、夏となれば、現在の根岸小学校から三ノ輪あたりまで一面に広がっていた蓮田は、音無川をはさんで「あふれるように\*21」蜚が飛び交ったという。明治17年根岸に生まれた水島爾保布が子供の頃を振り返り「野菜の洗い場があつて、いつも手拭をかぶつて襷をかけた農家の女たちが、畑から取

つて来たつけ菜や大根や葱などの泥を洗つてみた\*<sup>22</sup>」と記す如く、それはまた、人々の生活になくなくてはならないものでもあった。子規に「柳散り菜屑流る小川哉」(27年)という句がある。音無川は、昭和7年以降は暗渠となり、現在は台東区と荒川区との境界線付近を流れている。

根岸の北側が接していた三河島田圃は、天心のお気に入りの場所でもあった。明治22年に天心が住んだのは借家であったが、その2年後には中根岸四番地に自らの家を購入移り住んだ。これは天心にとって初めての持ち家である。彼はこの家に移り住むと間もなく、愛馬「若草」を飼い始める。当時天心が出かける時には、常に若草号に乗っていた。東京美術学校への通勤もまたしかりである。そのため根岸党では天心に「馬の御前」という表徳が与えられた。露伴は後にその頃の天心が「小紋縮緬のぶつさき羽織、腰に馬乗提灯を打ちこんで、馬上寛かに白昼の町内を乗廻し」、「よく馬上に半弓を携へて三河島の田圃で鳥を射てみたことがあつた」と語り、そして露伴が「鉄砲を担ぎ廻つてみると、御前早速見つけて、『鉄砲で鳥を獲るなんて野暮な真似をするな』といふ調子で累々叱言を喰つたものだ。きつとその頃は三河島の田圃で流矢の一筋ぐらゐ見かけた人もあつたらう。私なども泥田の中で折々見たことがあつた\*<sup>23</sup>」と続けている。

その他、江戸期より根岸第一の名物であった鶯も健在で、森田思軒が明治23年に「此ころは余か僑居の庭に毎日鶯の来り鳴くあまりに可愛ければ\*<sup>24</sup>」と記している他、正岡子規が明治27年に「雀より鶯多き根岸哉」「鶯や年々ふゑる梅の花」「摺小木に鶯とまる根岸かな」と詠むなどしている。江戸期より毎年3月の恒例行事であった鶯会の発表会場は、安政年間あるいは文久年間頃に閉園になったとされる梅屋敷から、同じ音無川のほとりに建つ鶯春亭に場所を変え、関東大震災前まで続いたと言われる。幸堂得知は明治29年に鶯会について「一向宗門の家にてはホー法華経を嫌ふゆへ之を除くの外、荒物屋でも豆腐屋でも焼芋屋でも、会一日を鶯の宿に売る。是を鶯宿梅といふ\*<sup>25</sup>」と洒落をきかせて記しており、当時の盛況ぶりを窺わせる。

根岸党活動期の根岸を彩ったものは、御行の松、音無川、三河島田圃、鶯など、自然の風物だけではない。根岸及びその近傍には、そこに住み、集う風流人たちにふさわしい割烹・料亭が数多くあった。そのうち以下に記す伊香保・

伊予紋・鶯春亭・忍川などは、根岸党が牙城として連日連夜会飲したとされる店でもある。

鶯谷の伊香保は、元来は「玉の湯」という銭湯であったが、明治15年頃より群馬県伊香保温泉から鉱泉を取り寄せ、「東京に於ける温泉の始祖\*26」として、また「温泉と滋味ある調理とを以て名高\*27」かかった。根岸党終焉後のことになるが、同園の前には明治45年に鶯谷停車場が誕生、その年平塚らいてうら青鞥社が同店にて一周年記念会を行っている。『下谷繁昌記』（大正3年）によると、当時の「建築物は建坪階下二百九十二坪余、階上九十七坪」で、美術工芸の親睦団体「国華倶楽部」が事務所とするため改築工事を行っていた。大広間の舞台の杉戸には寺崎広業、山田敬中が松の樹を描き、引き手やその他の彫刻は「現代大家の鉄筆製作になり、間ごとに現代大画家の筆を以て飾り、全美を尽さん計画\*28」であったという。建物の一部は、宗教団体の布教場となって戦後に至るまで存続していた。

同朋町の伊予紋は、四国伊予国から出てきた紋次郎という人が開業した料理店で、東京でも屈指の名店であった。同朋町は御徒町の傍で、すぐ近くの数寄屋町とともに下谷花柳界として、東京では柳橋、新橋につぐ格式と規模を誇った地域である。森鷗外の小説「雁」や「キタ・セクスアリス」を始め多くの文学作品に描かれる。平田秃木の『秃木遺響文学界前後』には、「下谷の旗亭といへば、何といつても伊予紋であった。下谷の伊予紋か、伊予紋の下谷かと云ひたい位であつたのだ。初めは普請も極く粗末な、古ぼけた、物堅い仕出し屋風の家であつたが、その頃は主人自ら包丁を取つてゐたといふことで、つき出しに出すから漬の鮭や鯖の味は格別で、全盛時代にもそれは変わらず、こちらの御飯と香の物ばかりは何処にもありませんと、老妓連もその至れり尽せりの深い用意を讀へてゐた。めきめきとはやり出して、改築成つてあの大屋台となり、押しも押されもせぬ一流の旗亭となつたのだが、それが今下谷から姿を消してゐるのは、何となく寂しい思ひがする\*29」と記されている。

中根岸の鶯春亭は、音無川の畔にあった料理店で、「風流人の詩歌俳諧其他の会に仕出しもすれば、又その為めの席の設けもあつた\*30」。天ぷらの一種で衣に鶏卵の黄身を使った「金ぷら」が名物で、日暮里との境の高台にあったため、晴れた日にはその座敷から、根岸、三河島村一円の田圃を通して筑波山が

眺められたという。根岸の春の風物詩であった鶯会の発表会は、前述のように梅屋敷の跡を継いで安政年間よりこの鶯春亭で行われた。『下谷繁昌記』には、「庭内閑雅にして古樹多く、新設の料亭に見るべからざるの趣あり。加ふる建築又数寄を集め、すべて鶯に縁あるものを選び、壁の如きも所謂根岸土を用ひ、夜間は鶯色そのままを現はし、変り行く世にそぞろ昔日の根岸を忍ばしむるものあり\*31」と記されている。

上野三橋町の忍川は、店の前を流れる小川「忍川」からその名をとった豆腐料理店である。忍川が開かれたのは明治21年だが、この店の開設者は、根岸党員の一人、幸堂得知であった。得知は滑稽小説の名手として、あるいは劇評や俳諧で名の通った人物であったが、本山荻舟の「根岸派の人々とその後」によれば、「食物の通で洗練された味覚の持主、蕎麦の話も聞いたことがあつたし、豆腐が殊に好物で\*32」もあったという。同店の開店を前にして、『読売新聞』には、「豆腐党の一員」饗庭篁村が「主に代りて」広告文を書いており、そこには「ぎせい豆腐」「むつの子豆腐」「湊揚豆腐」「しきし豆腐」など、現在では聞きなれないメニューも並んでいる\*33。特別に早朝に朝食を準備させるなどの自由がきいたこともあり、根岸党が催した旅行会の待ち合わせ場所として使われることも度々あった。この忍川については、平井鏗二郎『東京風俗志<sup>ママ</sup>』中の巻（明治34年）には「豆腐の料理を以て著るきもの\*34」と、また、『下谷繁昌記』には「豆腐料理として頗る名高く、根岸の『笹の雪』と併び称せらる\*35」と記されていることから、中々の名店として認知されていたことが窺える。

この他にも、此花園（汁粉屋・根岸）、笹の雪（豆腐料理・根岸）、玉の家（蛸汁料理・鶯谷）、澤野や（団子・根岸）、鶯溪園（盆栽四季の草花・鶯谷）など、根岸界限には数多くの有名店があった。

根岸への交通機関の第一歩である市内電車の路線延長は、明治41年以降のことであり、それ以前における市中からの道は、上野の山を越えて鶯谷の新坂を下るか、あるいは山下から上野停車場と桜雲台の間の崖下の道を北に進み、坂本の大通りに出るのみであった。市内電車の開通をみるまで、根岸への交通の便が人力車を利用する他は、江戸時代をそのままに自分の足に頼るしかなかったことも、その土地柄を存続させる要因の一つになったのかも知れない\*36。

添田達嶺が、明治29年から30年頃の根岸を、「一寸東京の郊外と云つた感じ」の「画人や文人の住むに適したひなびた風雅な町」と回想し、根岸党の富岡永洗の他、梶田半古・小堀軯音・水野年方など、「将来の日本画壇を背負つて立つ意気旺んな若い画人達が、朝に晩に相往来して怪気焰を挙げてゐただから賑やかなことであつたろう\*<sup>37</sup>」と述べていたり、高須梅溪が明治30年頃の根岸を「今よりははずつと閑静で、しつとりした情味が、何処となく、一体に流れて居た。(略) 文学者や、詩人が住むには、ふさわしい場所だと思つた\*<sup>38</sup>」と記している。大正期末までに根岸に住んだ者には、これまで挙げた者の他にも、浅井忠・大槻如電・鎗木清方・河東碧梧桐・寒川鼠骨・條野採菊・高橋由一・高島藍泉・中根香亭・中村不折・村上浪六など、多くの文人たちが名を連ねている。

## おわりに

以上、根岸を中心として根岸党がどのように形成されていったのか、さらに、根岸党の名前の由来でもあり、彼らの活躍の場であった根岸という場所についてみてきた。このように根岸という空間は、江戸期以来、文人たちが集うにふさわしい土地柄を有しており、そしてその土地柄は、根岸党の活躍期においてもなお依然として続いていたものと思われる。明治20年前後、まるで何かに引き寄せられるかのように、根岸党を形成する人々が根岸に終結した。彼らが根岸に居住した点について柳田泉氏は、「強いていへば、当時は都心を離れてゐたかういふ土地を選ばしめた彼等の気持ちに何やら傲世逸俗といったやうな共通なものがあつたといへぬことはない」としながらも、「ただ何となく住みよといふ地理的選択から、自然にさういふ結果になつたものであつた\*<sup>39</sup>」と述べている。柳田氏が記すように、根岸党員が根岸とその周辺に住んだのは「ただ何となく住みよといふ地理的選択から、自然にさういふ結果になつた」のかも知れない。しかしながら、根岸党員の意識の中に、江戸期以来の文人たちの暮らし振り、遊び振りがなかったとは考え難い。彼等は彼等の考える文人像のもとに、文人が住み、集うに相応しい場所として根岸の地を選んだのではないだろうか。また、彼らが「下谷党」でも「谷中党」でもなく、「根岸党」

と呼ばれることになったのも、そうした根岸の土地柄に対するイメージが、当時一般に共有されていた事に起因すると言ってよいのではないだろうか。

## 註

- 1 饗庭篁村の「牡丹餅の処分」(『演芸画報』第七卷第五号〔大正2年5月〕)に、「得知さんと知合になつて三十九年」(172頁)とある。
- 2 『読売新聞百年史』(昭和51年、読売新聞社)182頁。
- 3 藤田隆三郎は「逸事の六」(『自恃言行録』41頁)に、「高橋君が根岸に転じた後に私も人の勧めに従つて根岸に移つて高橋君の近傍に住んだ」と記している。
- 4 岡倉一雄『父岡倉天心』(昭和46年、中央公論社)65頁。同書は、昭和14年刊行の聖文閣版『父天心』を復刻したものである。同書に収録されている岡倉古志郎氏「祖父天心と父一雄のことども——『父岡倉天心』の解説にかえて」には、昭和18年12月に一雄氏が亡くなるまで続いたという、一雄氏と露伴との交遊についての記述がある。それによれば、天心が亡くなった大正2年9月以後、一雄氏は露伴と同じ向島に住み、足しばし露伴宅に通い、俳諧の付け合いをしたり、碁や将棋の盤を囲んだり、しばしば川釣りに出かけたりしたという。
- 5 読売新聞の茶話子「逸事の二十五」、前掲の『自恃言行録』134頁。
- 6 「画家転居」、『読売新聞』明治20年8月23日。
- 7 『近代日本美術事典』(平成元年、講談社)108頁。
- 8 この時の模様は、宮崎三味が「露伴子」(『大阪朝日新聞』明治23年5月15日)に記している。
- 9 「決闘の助太刀」、『読売新聞』明治22年6月12日、第二面。
- 10 『天心手藁』、下村観山遺族所蔵(平凡社版『岡倉天心全集』第三巻所載)。『日本美術』第一七号(明治33年3月)に掲載された天心「日本美術史論」の草稿に当たるものに「日本美術史綱」(日本美術院所蔵)と題された天心自筆の原稿があり、これを浄書し、太華が「天心手藁 日本美術史論第一章」と書き和綴じ表装したものが『天心手藁』である。太華はその「序」にそうした事情について次のように記している。「余ノ初メテ岡倉君ト相知レルハ、明治二十二年、君ガ高橋自恃庵ト与ニ国華ヲ創刊セシ時ニアリ。(略)君自恃庵ノ言ヲ過信シ、爾來作ル所ノ文字多ク余ヲシテ之ヲ校訂セシム。其急ヲ要スルモノハ深宵親カラ余ガ学屋ヲ叩キ、坐上刪潤セシムルコトアルニ至ル。蓋シ君、文才天縱、多ク一氣呵成ニ出ヅ。故ニ舊抜ニシテ奔放最モ喜ブベシト雖ドモ、間々瑕玼ナキコト能ハズ。余即チ一々指摘改剛シテ豪モ仮借セズ。君拒否スル所ナク、固執スル所ナク、喜ンデ尽ク之ヲ容ル。此編ハ余ガ日本美術ノ編集ヲ幹スルノ際、君ガ余ヲシテ刪定セシメタル手稿ナリ。／君、客年二月赤倉ニ没ス。今偶然此稿本ヲ筐底ニ獲、何ゾ今昔ノ感ニ勝ヘンヤ。即手テヅカラ裝潢シテ一冊トナス。／大正三年八月十五日 太華」(筆記内容及び引用は、「解題」、『岡倉天心全集』第三巻〔昭和54年、平凡社〕474頁による)。同書では、天心が「日本美術史考」と題したところを太華が「日本美術史論」と直し、本文全体にわたって太華の朱が入っており、その添削されたものが『日本美術』に掲載された論文と一致するという。天心と太華との間に、強い信頼関係が結ばれていたことが窺える。
- 11 本文に挙げた者以外で根岸に住んだ党员としては、遅くとも明治26年までには幸堂得知が上野広小路町から根岸に転居し、明治11年に上京した富岡永洗は、何時からかは分からないが、少なくとも明治29年には根岸笹の雪横町に住んでいたとされる。もちろん、根岸党员には基礎的研究が殆ど行われていない者もいるため、これ以外にも根岸とその周辺に暮らした者がいる可能性があることは言うまでもない。



- 12 景山政恭『江戸麹町六丁目』安政3年、尾張屋清七。テキストとして使用したのは、斎藤直成編『江戸切絵図集成』第五巻（昭和57年、中央公論社）69頁。
- 13 岡山島『江戸名所花暦』（文政10年）。テキストとして使用したのは、今井金吾校注『江戸名所花暦』（昭和48年、八坂書房）12頁。
- 14 斎藤幸雄・幸孝・幸成『江戸名所図会』（天保5年～天保7年）。テキストとして使用したのは、石川英輔・田中優子監修『原寸復刻江戸名所図会』下（平成8年、評論社）322頁。
- 15 水島爾保布『愚談』（大正12年、厚生閣）32頁。
- 16 平田雄三「第三編街の変遷」、『台東区史』上巻（昭和30年、東京都台東区役所）568頁。
- 17 田山花袋『東京の三十年』（大正6年、博文館）165頁。
- 18 塩谷賛『露伴と遊び』（昭和47年、創樹社）13頁。
- 19 前掲の岡倉一雄『父岡倉天心』59頁。
- 20 同上（59頁～60頁）。
- 21 松本和也「下谷根岸いまむかし」、『下谷根岸』（昭和60年、台東区教育委員会）10頁。
- 22 前掲の水島爾保布『愚談』30頁。
- 23 幸田露伴「遅日雑話」、『文章倶楽部』昭和3年3月号。テキストとして使用したのは、『露伴全集』第三〇巻（昭和54年、岩波書店）315頁。
- 24 森田思軒「南窓渉筆」、『国民之友』第六卷第七七号（明治23年3月）26頁。
- 25 幸堂得知「来年の愚調法東京年中行事」、『幸堂滑稽談』（明治29年、博文館）235頁。
- 26 『下谷繁昌記』（大正3年、明治教育社出版部）311頁。
- 27 同上（233頁）。
- 28 同上（311頁～312頁）。
- 29 平田禿木『禿木遺響文学界前後』（昭和18年、四方木書房）116頁～117頁。
- 30 前掲の水島爾保布『愚談』31頁。
- 31 前掲の『下谷繁昌記』312頁。
- 32 本山获舟「根岸派の人々とその後」、『日本演劇』第二巻第一号（昭和19年11月）29頁。
- 33 饗庭篁村「豆腐一式調理開店報帖」、『読売新聞』明治21年8月14日、第四面。
- 34 平井鏗二郎『東京風俗志』中の巻（明治34年、富山房）156頁。
- 35 前掲の『下谷繁昌記』232頁。
- 36 一方で、根岸にも文明の波が押し寄せていたこともまた事実である。明治16年、根岸の環境を一変させ得る大きな出来事が起こる。日本鉄道株式会社が上野・熊谷間の鉄道営業を開始したのである。これが上野停車場の始まりであり、日本における私設鉄道の嚆矢である。翌年には、それが高崎にまで延び、旅客列車が一日に三往復した。18年には上野・宇都宮間が開通し一日二往復、その翌年には上野・仙台間が開通し直通で一往復、24年には上野・青森間が全通し両極より一往復するようになり、また、上野・秋葉原間に貨物列車が六回運転されるようになった（『上野駅史』〔昭和7年、上野駅互助団〕）。つまり、当時上野駅に発着する列車の数は、上野・高崎間を走る列車が一日に三往復で六回、上野・青森間を走る列車が両極より一往復で三回、その他に上野・秋葉原駅間の貨物列車が六回の計一五回となる。鉄道建設に当たっては、上野の山の崖に沿って北上し、台上と根岸とを切り離すことになったが、その地こそ現在の鶯谷駅付近、つまり、鶯の棲息地域であった。列車の騒音は、人間ばかりでなく、江戸期より根岸の第一の名物とも言われた鶯にも被害を与えた。しかしながら、先に記したように汽車の通過頻度は現在ほどの激しさではなく、明治中頃の根岸は概ねその余情を保って

いたようだ。

- 37 添田達嶺『半古と楓湖』（昭和30年、陸月社）25頁。
- 38 高須梅溪「文芸の東京」、『文章世界』第一五卷第五号（大正9年5月）154頁。
- 39 柳田泉『幸田露伴』（昭和17年、中央公論社）172頁。

※本稿で扱う人物は、複数の号を持つものが殆どであるが、便宜上、現在最も代表的であると考えられる単一の号で表記した。

※本稿における資料の引用については、原則として旧字や句読点、踊り字を現在通行する字体に改めた。総振り仮名またはそれに近いものについては、筆者の判断により適宜割愛し、句読点がないものについては、筆者の判断により必要に応じて補った。

&lt;ABSTRACT&gt;

## The Negishi-tô and Negishi as a place

TAKAHASHI Sumiko

The Negishi-tô, the Negishi Party, was a group of *bunjin*, people in the pursuit of elegant things, in the Meiji period. The group was composed mostly of authors and painters. The Negishi-tô was not a literary or an artistic association but a sort of social club. Most of the members of the Negishi-tô lived in Negishi, Tokyo, or its neighborhood in about 1887 (Meiji 20). Nobody knows who began to call it the Negishi-tô, but it is certain that the name of the group derived from the name of the place, Negishi.

Negishi lies in the northeast of Tokyo, on the far side of the hills of Ueno. In the Edo period it was called Kanasugi-mura, in Toshima-gun, Musashi Province, and was a quiet land at the distance of about six kilometers from the central part of Edo. Most of Negishi was farmland in about the middle of the 18th century. From about the beginning of the 19th century the number of villas owned by wealthy merchants situated between the farms increased, and at the same time *bunjin* began to live there. 30 *bunjin* or more lived there in 1835, and it became a place of dissemination of a specific culture.

The Ogyô-no-matsu was one of the “famous eighteen pines” of Edo, and it is said that people could see the tree from anywhere in Negishi until 1928. A brook named Otonashi-gawa flowed by the Ogyô-no-matsu. It ran through the center of Negishi from east to west, and rich merchants’ villas, *bunjins’* houses, and so on stood in a line along the brook. Negishi was famous as a natural habitat of Japanese bush warblers, too. The Uguisu-e, a competition of Japanese bush warblers singing, was held in the Ume-yashiki at the side of the Otonashi-gawa,

and it was crowded with people who came from all over Japan every year in March.

The number of houses in Negishi increased after the Meiji period. But in the middle of the Meiji period, which was the active period of the Negishi-tô, Negishi was very much a remainder of the Edo period. I think they chose Negishi as a suitable place for *bunjin* to live and gather according to their image of what *bunjin* were. They came to be called not the Shitaya-tô or the Yanaka-tô but the Negishi-tô. This is probably because people generally shared the same image of Negishi in those days.